



No. 112

ティー・ブレイク

## Tea Break

フォルティシモ

最近の新幹線はのぞみ号が増え、ひかり号はめっきり少なくなった。これは結局、実質的な値上げなのであるが、これに対する不満が少ないのは、やはり「一分一秒でも早く」というのが人間の本来的な心情だからなのかもしれない。

ことに我々弁理士というのはせっかちで、何でも早くやりたがる。そしてそこに風情は埋没されてしまう。けれども、たまには変わった人も居て、帰省の際には新幹線を使わずに各駅停車を使うという。

その人いわく、「新幹線というのは速過ぎて、自分の気持ちが都会から田舎へと切り替わるよりも早く、田舎に着いてしまう。だから私は各駅停車で帰省するのです」ということで、中々良いことを言う人だと思ったのである。

そう言えば、私も、帰省の際には最短距離を選んで、特急で帰ったものである。そうして、その田舎ではよく「せっかちだ」と言われた。そしてその当時は「田舎の人たちが何を言っていることやら」とも思ったものであるが、帰省に使う電車の種類を変えるだけで何とかなったのであれば、むしろ積極的にそうすべきではなかったかとも思う。

そうして、よくよく思い起こしてみれば、私の母親というのもやはり典型的な田舎のおふくろさんで、非常におっとりとしていたもので、生前は、ペースの違いで喧嘩ばかりしていたような気もするが、事務所近くの駅で、後から一生懸命についてくる母親を必死に急かしている若者を見て、「今度の母の七回忌の時には各駅停車で帰ってみようか」とそう思ったその瞬間に、その情景が急にぼやけだしてきたのである……。

これが実は、今まで書いてきたティーブレイクの中で最も好きな「グラデーション」の内容であり、現にこれは評判がよかった。心の馴染む時間と、思い出と時間が移り行く様と、何気ない日常の光景の中にかつての母親と自分を重ねて思わず涙があふれてくる瞬間を、「グラデーション」という題目で言い切ったものであり、自分で言うのも何であるが、やはりひとつの傑作であったように思う。

けれども、読者の心の糸を弾いたのは、こうした技巧によるものではないであろう。自分の母親に対して行なった親不孝というのを、誰でも持っているものであるし、また、失ってみて初めて「おばあさんというのは二人いるが、母親というのは一人しかない」ということが分かるからではないだろうか。

自分も親になってみて分かることは、果物等の「味にばらつきのあるもの」については、親というのは、美味しいものを選んでそれを子供に与えるものである。現に私も、母と食べた果物は全て甘かったような気がするが、あれは、思い出が味付けしたものではなく、本当に甘かったのである。これは、自分が親となって、初めて分かるものである。

そうして、そろそろ13回忌を迎える頃になると、母親の記憶も次第にぼやけていくようになるのかと思っていたが、実はそうではない。何かにつけて思い出す機会が増える。だからこそ「グラデーション」を超えるものがどうしても書けず、それはそれで困ったものだとも思う。 (正)